



しがだい

==滋賀大学広報誌==
第3号 平成12年6月

滋賀大のホームページ

あなたも

<http://www.shiga-u.ac.jp>



アクセス



ませんか

【表紙解説】

チュウザン

裏表紙右上の城は中山城。1406年の尚巴志の琉球統一以降、1879年に明治政府に明け渡すまで琉球王尚氏が居住した。城の名「中山」は、琉球国王の出自が沖縄本島中部の中山王であり、王の正式名称が「琉球国中山王」であったことによる。左下の泊村の港は天然の良港で、古くは南蛮貿易の船も立ち寄った。表表紙に見える停泊中の船は、沖縄本島の南部と北部を結ぶ交易船山原船である。

《目 次》

座談会 滋賀大を語る（二）

魅力ある学部づくりに向けて	4
---------------------	---

トピックス

活発な意見と厳しい注文

運営諮問会議がスタート	9
-------------------	---

初の外部評価委員会開かれる	9
---------------------	---

大学・両学部の理念

教育学部	教育学部理念ワーキンググループ	10
------------	-----------------	----

経済学部	経済学部理念ワーキンググループ	11
------------	-----------------	----

ここがポイント!!「ネット社会を知る」	中川 雅央	12
---------------------------	-------	----

公開講座から

「気」への招待 PartⅡー自己治癒力にいどむー	豊田 一成	14
--------------------------------	-------	----

附属史料館収蔵資料の紹介

湖東中郡日野八幡在々持余家見立角力	南田 孝子	15
-------------------------	-------	----

公開講座開催案内（8月～12月）		15
------------------------	--	----

環境教育湖沼実習センターの調査艇の紹介	遠藤 修一	16
---------------------------	-------	----

読書のひろば・研究のひろば	内田 耕作・木島 温夫	17
---------------------	-------------	----

大学院 グローバル・ファイナンス専攻

（修士課程）新設に向けて	有馬 敏則	18
--------------------	-------	----

陵水学術後援会協力 特別講義『現代の経済』	小川 功	19
-----------------------------	------	----

念願の教育学部研究棟新営工事始まる		20
-------------------------	--	----

近江の散歩

「近江商人」の里、五個荘町へのいざない	宇佐美 英機	20
---------------------------	--------	----

地域に貢献する大学開放をめざして

ネット授業へ取り組む情報処理センター	中野 裕治	21
--------------------------	-------	----

報道された主な記事		22
-----------------	--	----

附属学校から

春を自然をいっぱい見つけたよ！		22
-----------------------	--	----

お気づきでしたか？

= 表紙の種明かし =	千本木 修一	23
-------------------	--------	----

彦根キャンパスの出来事		23
-------------------	--	----



滋賀大を語る(二)

イントロダクション

司会 現在、大学を取り巻く環境は独法化問題など非常に厳しいものがありますが、本学として初めての試みである滋賀県高等学校長協会との懇談会でも大学の現状に関連してかなり厳しい意見が出たようです。そこで、本日は滋賀大広報第三号の企画「滋賀大を語るパート」ということで、両学部長と将来計画に関わった委員の先生に参加していただきまして、「魅力ある大学づくりをどうするか」というような点でお話しいただければと思っております。まず、懇談会の時の雰囲気とか印象というものを出席された川嶋副学長のほうからお話し下さいませ。

魅力ある
学部づくりに向けて

川嶋 三月十五日に本学の大会議室で、滋賀県の高等学校長協会の十一名の校長先生(代理を含む。)がみえ、本学からは学長をはじめ学部長、学生部長、附属図書館長、学長補佐室員、事務局長が出席し、大学側からの現状報告と、質疑応答ということで話が進みました。私の印象では、非常によい雰囲気でありキチツとした意見交換ができたと思います。その中で、今日のテーマにも関係しますところを二、三始めにご報告しておきたいと思います。

一つ目は、受験生、高校側からして大学を

受験する際に、どういう尺度でもってみているかということでありませうけれども、昔に比べてレベルが下がっているのではないかといい、かなり厳しい意見だと思えます。二つ目は、受験生が滋賀大学経済学部と私学の両方に合格した場合に、私学のほうに流れていくということです。三つ目は本学の教育学部の出身の校長先生が話された、教員への非常に低い就職率の問題です。三年先には高等学校で五〇学級減ということも踏まえて、後輩の進路を非常に危惧されていました。

学部の教育理念とは

司会 大学の理念策定を受けて両学部もそれぞれの特徴を出した教育理念を作られているとかがっておりますので、教育理念における一番強調したい点、特に、どういう学生を世の中に送り出していきたいかという点につきまして、両学部長からお話をうかがいたいと思います。まず、教育学部長からいかがですか。

石上 教育学部は教員養成の学部という一般的なイメージがなんとなくあるのですが、

実際には学生定員二四〇名の内半分近くの。名はゼロ免といわれる教員養成ではない環境教育課程と情報教育課程なんです。実は今まで別々の教育目標と教育課程を擁するものだろうという具合に考えてきた、何となくね。そういう訳で、学部を通しての教育上の理念というのは、今まで正直申し上げて、突き詰めて考えてはこなかったんです。

教育的視点が求められるのは教育界だけではないという観点から『深い教養と、知性に支えられた人間性にあふれ、専門性の高い人材養成』を方針目標にしたのですが、詳しく言うと『グローバル化の一方で、多様化が進む変動社会にあつては、教育界のみならず、産業、生活、労働、情報、環境、福祉などの広範囲な分野で、動かない視点を持つという意味で、教育的視点からの見識と洞察力に基づいて、問題解決の方向を提示できる人材の養成が求められている。』という認識に

座談会出席の皆さん

- 石上 三雄(いしがみ・みつお)
教育学部長
成瀬 龍夫(なるせ・たつお)
経済学部長
喜名 信之(きな・のぶゆき)
教育学部教授
黒石 晋(くろいし・すすむ)
経済学部助教授
門脇 延行(かどわき・のぶゆき)(司会)
広報委員長(副学長:経済学部教授)
川嶋 宗継(かわしま・むねつぐ)
広報委員(副学長:教育学部教授)

経済学部

『士魂商才』とは…



成瀬 経済学部長

立っているのです。

司会 それを、どう具体化するかという問題ですよ。それは、あとで聞くとして、今度は、経済学部のほうはいかがでしょうか。

成瀬 経済学部は、経済人を養成することが基本的な使命ですが、今度の経済学部の理念は、われわれが目指す人材を、古くは『士魂商才』、新しくは『グローバル・スペシャリスト』という二つのキーワードで明確にしました。

今回、経済学部の前身である彦根高商が士魂商才という非常に明快な教育理念を持っていたことを再発見しました。ただ、新制大学になりましてから、一般的抽象的な大学の理念に埋没して、経済学部としての理念はなかったわけです。

その反省のもとに、最近、教育理念として打ち出しているのが、グローバル・スペシャリストです。グローバルは至る所で強調されますが、ここで忘れてならないのが地域への貢献つまりローカリズムという点で、双方を両立させていくことが大事です。専門的な職業人（スペシャリスト）ということ

についても、これは彦根高商以来、実学重視の伝統があります。

司会 黒石先生、いかがですか、苦心された点があったかと思うんですけど。

黒石 士魂商才という言葉に今回出会って、いろいろ調べてみたところが、大正デモクラシーの中での彦根高商では『教養を持った』という意味で士魂とい

う言葉を独自の意味で使っているんです。この士魂というのが学部理念というグローバルな知識・見識ということで、商才というのが、商業・経済の理論、専門的知識と解釈してみました。

これと別に、成瀬学部長がおっしゃいましたけれど、今回、やはり実学的な伝統というのを強く打ち出したかったんです。経済学部では最近の学生に『目的意識』の低下傾向があります。今回は意識・知識・見識と言った三つの『識』を文書の中に込めまして、それに基づいて問題探究能力の育成ということを目指しました。一番最初に掲げた『意識』を具体的なものにするのが実学的な伝統ですね。

石上 ただね、教育学部も今入ってくる学生自身が明確な目的意識というのをそれほど自覚していないという問題があるんですよね。教師も悪くないという学生もひっくりめて、六五%ぐらいなんです。

成瀬 結構いいですよ、それは。石上 目的学部だから。それでもね、今の厳しい教員採用試験を何とか乗り越えていくというレベルになると、バックスと脱落していくわけですよ。だから、これからの教育というのは、言葉はちよつと悪いんだけど、強烈なイメージでもって学生たちを集めて、目的意識を植えつけることもひっくりくるめて中でちゃんと教育をするという、そのところが避けられないんじゃないかと僕は思う。



黒石 経済学部助教授

成瀬 教育学部でそういう目的意識をもたせるような教育をする具体的なシステムは何かあるの。

石上 まだ、今、模索中、正直言って。特に教員の資質を高める上で、教職関係のカリキュラムが大変重要だと思う。特に、基礎的な部分が。司会 それが大事ですよ、そのくらい理念があっても、その理念を具体化するために、教育のカリキュラムなり、制度なりに、具体化しないと意味がないのだから。

デリバティブも学ぶ

司会 実学の伝統を活かすという点でいくと、情報リテラシーと英語といいますよね。特にOBの方なんかと話をすると、コンピュータと英語は是非とも後輩に教えて欲しいと言われているんですよ。実学の伝統を念頭にしながら、理念を具体化するためにどんな教育改革を考えていますか。

成瀬 新入生のオリエンテーションで、大学の目的はアカデミックな教育を通じて学生諸君の潜在的な能力を高めようとしているんだと言ったんです。それによってどの分野でもやがてはリーダーにもなれるというものなんです。とは言っても、即戦力も決して軽視しているわけじゃない。例えば、各学科のオリエンテーションでカリキュラムの体系に基づいて履修モデルを示したり、一回生全員に情報リテラシー教育をやっています。第二語

教育学部における コミュニケーション

石上 教育学部長



学の在り方も、学部の教育研究体制整備委員会での検討事項になっています。

また、FD委員会によるカリキュラムに関する学生アンケート調査が今年の三月まとりまして、これをもとに今後は、いろんな短期集中型授業だとか、外国の学年暦に合わせたような、留学システムだとか、語学の見直しとか、専門ゼミへの配属の年度の在り方も考えていきたい。さらに、デリバティブ（金融派生商品）などの新しい分野を扱う科目も増やしていきたいと思っています。

司会 経済学部の経済学科の中で、ミクロ理論とか、マクロ理論のような基礎理論をたしかークラス六。人の三クラスで、キチンとやっていますよね。しかも、同一カリキュラムで統一試験にしているという、この努力は強調してもよいのではないでしょうか。

石上 それって、語学専門学校と同じやり方なんじゃないの。経済学部の教育の中で重要な意味を持つということをはッキリさせるべきだ。

司会 これまでの大学教育は教官個人に委ねられてきた傾向があったと思う。でも、これからは滋賀大の経済学部はこういうものだという大学の個性やアイデンティティを持った教育も考えていくべきでないか、僕はそう思う。だから、一定の到達度を定めてこれを目標に教育することが意味を持つんですよ。滋賀大学の経済学部の社会に対する保証書、そういうブランドになるというふうな

講義も必要だと思っんですよね。

メールが使えないと…

司会 教育学部はどういう状況ですか。

石上 数年前からメディア・ツール活用法を義務化しているので、自分がメールを打てない限り、自分のレポートのテーマも書けないという環境に置かれているんです。少人数教育に関しても、教育学部は全学年合わせて千人ぐらいいいじゃないんですが、それなのに、授業科目が一。。。以上あるんですよ。だから、最初から少人数なんです。うちは、このところ二三年毎にカリキュラムが変わっているから、教官側が履修モデルを提示しています。

外国語コミュニケーションという講義があるんだけど、いわゆる英語とかいう授業じゃなくて、会話、コミュニケーションなんです。これは、今年の入学生から必修で、それを年に二単位

だから、週に一回だけれども、それを取らない限りは、卒業できないという制度に移行している。

黒石 やっぱ、少人数で？

石上 いやあ、そこそこは少人数といっても、そんな少人数にできない。やっぱ、教官の負担を考えると、どうみても三丁四。人ということ

がよいところだと思っけどね。

成瀬 結局、うちもキッチリ成績評価をしていくためには、学習の到達目標というものを



喜名 教育学部教授

取り込んでいかないと、学生の学問的成長度合が判らないんだ。たとえば、語学の方面でも、経済学の基礎知識の面でも、幾つかそういうレベル設定してできないものかと考えているんです。

石上 学生にとっての到達するメリットは？

成瀬 学生全体について、到達度のランクづけをして、一段上を目指すようにさせる。Cの人間はBを目指し、Bの人間はAを目指すように。そういうふうな到達度評価でやっていかないとダメですね。ただし、そのへんの議論は難しいですね。

川嶋 語学教育に関しては、能力別クラスに分ける例が、他大学で見られます。学生にとってもそのほうがベターかも知れません。石上 そういうのを、うちが語学じゃなくて取り込んだのが、メディア・ツール活用法という授業で、これはユニット制で、レポート

とかをメールかなんかで提出して目標に到達したら、「あんた合格、あんた合格」という形でユニットを足していくわけ、そのユニットがある程度、超えたら「可」、さらに超えたら「良」、もっと超えたら「優」というやり方でやって、割り

とそれに近い。

大学院を昼夜開きたい
司会 学部の将来計画の関連では、大学院の問題があると思いますが、どうでしょうか。

滋賀大学にも ドクターコースを

喜名 現在教育学部は、地方の教育学部はどこもそうなんだろうが、いろいろとむづかしい状況にあり、解決していかなければならない課題も数多くあると思います。その中で、われわれが現在取り組んでいるのは、大学院の拡充です。第一は、大学院の昼夜開講制です。私どもの大学院教育学研究科は、現職教員の再教育という点が特色であり、現在も多くの現職教員が勉強しています。しかしこれまで授業は、昼間中心でしたから、限られた人しか入学できませんでした。そこで、地域の現職教員や社会人への学習機会を広げることができないかと考え、昼夜開講制の大学院に移行することを考えています。第二に、環境問題の深刻化や情報化社会の到来といった問題は、今日の学校教育においても対処していくべき問題となりつつありますが、この環境教育や情報教育の指導者や専門家を育ていくこともこれからの大学に期待される重要な役割だと思います。そこで大学院修士課程学校教育専攻に、二つの専修、環境教育専修と情報教育専修を新設したいと考えています。

司会 経済の方はどうですか。

成瀬 経済は、経済と経営に加えて第三番目の専攻として、グローバル・ファイナンス専攻の増設を要求しています。プロフェッショナルでハイレベルの専門教育をやるとういう意気込みが高いのです。それをステップにして是非、ドクター・コースを設置したい。ドクターができて初めて大学院教育も完備します。

あと、大学院に関連して大事なものは、留学

生です。今、学部四十四名、大学院四十六名、合計九〇名で、まもなく一〇〇名を超えます。留学生の受け入れという点では、経済学部は国立大学の中でも先進的なんです。昭和四十八年から受け入れているんですから。留学生のためにも、ドクター・コースが望まれます。彼らはドクターをとって帰りたいのです。

ところが、留学生に対する教育対策が十分



門脇 広報委員長・川嶋 広報委員

ではない。今まで、キチツとした留学生用のプログラムができてなかったもので、これから検討開始というところですね。

川嶋 留学生は大学全体で一二七名で、大学の規模としてはすごく評価が高い。国際交流会館もできましたし、留学生用のプログラムもできると質も向上して、数も増えて、さら

に評価が上がるというふうに考えると、留学生対策の充実ということは、おっしゃったように大事なかなと思います。

入学者の学力低下が心配

司会 学生の学力低下の問題について、どうでしょうね。そもそも、先生方、どう考えられているかということと、どう対応するかという問題があるかと思うんですが、喜名先生はいかがですか。

喜名 学力とはなにかという問題はあるのですが、この五、六年急激に落ちているという印象をもちますね。

司会 何が理由だと思えますか。

喜名 受験勉強がマニュアル化して、マニュアル化されたことしかやってこなかったということがあるのではとされます。その結果、それ以外のこと、例えば読書をするというようなことを全くせずに大学に入ってきた学生が多いような気がします。受験の知識はあるが、一般教養の乏しい学生が目につきました。

司会 何か対策が必要と思いますが。

黒石 滋賀大学の経済学部の場合は、今までホームルームという制度がないんです。やっぱり、もうちょっと手取り足取りみたいなことを制度的に行う必要があるかもしれません。こういった現実を先生の側が受け入れられるかどうかというのは重要なことです。

喜名 これは同僚と話すことでもあるのですが、正規のカリキュラムとは別に、読書指導のようなことから始めなければ、学生た

現在の入試制度と 高等学校との連携

ちが大学教育になじんでいけないのではと考えます。受験勉強と大学教育の間の溝を、かつての学生ならそれぞれの教養の力ともいべきもので埋めることもできたのでしょうか、これからの大学教育は、この溝を埋めていくとも考えなければなりません。司会 僕は入試センター試験のシステムと、われわれが試験科目を減らしてきたということ、技術的に専門的に特化するという力はあるんだけど、大学に入ってからのいわゆる学力と言われるものに反映してないことを心配するんですね。僕は入試制度、たとえば、五教科にするというようなことは考えてもいいと思うんですね。

石上 いわゆる知育といふのかな、知識を獲得する教育をちょっと軽視し過ぎて、そういうのに落ち込むと暗記物になるとか、何とかそういうことでついつい避けてしまっただけでも、いろんなことを考えていくベースに一定の知識、あるいは、体系化された知識というのは、やっぱり、重要なんじゃないかなと僕は思う。受験科目は今まで減らす方向にいったのが最近、増やすことを認めるという方向で動き出した。

この前の校長会との懇談会の時の話ですが、「基礎学力を付けて、大学へ送り出したいが、五日制への対応で、学力を付けて送り出せるかどうか、疑問に思っている」と高校の先生自身が既に判断をしていて、「高校と大学の接続連携について、学んでいない教科については、どちらかが結び付けないと接点が埋まらない」と高校側が言っているのです。結局は、それを埋めるのは大学だと高等

学校側は考えているわけです、今。だから、われわれは何か目的意識を持ってない学生であって、かつ、知識レベルもマチマチな学生が入って来るといふ前提で当面は対応せざるを得ないというのが現実だと思う。滋賀大のレベルが落ちてきたとかいうこともショックだったけれども、一番ショックだったのは、今のところがショックだったね。やっぱり高等学校側に要求するなり、大学に入ってくる前の学習がこうあってほしいということは、もっと明確に言ってもいいし、それに見合う入学試験というのを大学が考えてもいいと思う。

川嶋 少なくとも、「こういう学生に来てほしい」ということを、大学としてもっと出してもいいと思う。そして、それを入試に反映させることですね。

大学にも『営業』は必要!?

司会 「うちはこんなユニークな教育をしているよ」と、大学はもっとPRしたほうがよいのではないか。これまでの大学見学会だけではなく、オープン・ユニバーシティとか、高校にしかけて説明するとかが必要なんじゃないかと思いますが、どうでしょうね。

成瀬 必要なところへは僕は出かけて行かなければと思う、これからは。今までみたいに、待って来てくれるというふうに思っていたはいけないのではないか。むしろ、来てくれるところを探して。

石上 効率性を考えながらというのが僕を考えなんだけれども。ただ、高等学校訪問一

つとつても、学部がそれぞれ独自にプランを立ててやるのか、それとも大学としてプランを作るのか、この辺りの問題はああるね。

黒石 我々が、高校に説明に行くというのは、ある種、「営業」だというふうに考えなきゃいけないと思うんですね。だとすると、何か「売り物」をもって行かなきゃいけない。石上 それ、やってみる価値があるなあ。

黒石 これって、実は私学がやっていることなんです。たとえば入試を日本中でやる。あ、関西の大手私学などは関東でも入試をやるといっているそうだから。

司会 僕は売り物は、教育のユニークさだと思っただけで、それだけでは駄目なんだね。

黒石 サテライトで授業をやるというのも考えなきゃいけないですね。大変ですが、だけど、入試だと一回ですむ。

司会 少々長くなりましたが、両学部とも魅力ある学部づくりに向けて、今、どのような努力を行っているか、その一端でもわかっていただけたのではないかと思います。皆さん、長時間ありがとうございました。

活発な意見と厳しい注文 運営諮問会議がスタート



議長を務める 樋口 廣太郎氏

本学の教育研究上の目的を達成するための基本的な計画に関する重要事項、教育研究活動等の状況について本学が行う評価に関する重要事項、その他本学の運営に関する重要事項について、学長の諮問に応じて審議し、及び学長に対して助言又は勧告を行うことを目的として、第一回の運営諮問会議を六月二十二日（木）に、彦根プリンスホテルで開催した。

当日は、中島一彦根市長、西島安則京都市立芸術大学長を除く、八名の委員が出席して行われた。

会議では、加藤学長の挨拶に続き、議長に樋口廣太郎アサヒビール株（名誉会長・相談役）を選出、大学側から、国立大学を取りまく状況について、本学の教育研究の理念、本学の現状と課題、平成十三年度概算要求事項についての現状報告があった後、加藤学長が、『滋賀大学の現状と今後の大学改革の方向』について諮問した。

樋口議長の重厚で、かつ、軽妙な議事運びのなか、活発な意見交換とともに、委員から厳しい注文もあり、今後の大学改革を推進していくうえで、貴重な助言や要望が出された。



左から 田原、高田、國松、小澤 各委員



左から 宮崎、吉崎、吉田 各委員

運営諮問会議委員（五十音順）

小澤 和恵	滋賀医科大学長
國松 善次	滋賀県知事
高田 紘一	（株）滋賀銀行取締役頭取
田原 総一郎	ジャーナリスト
中島 一	彦根市長
西島 安則	京都市立芸術大学長
樋口 廣太郎	アサヒビール株（名誉会長・相談役）
宮崎 君武	（社）滋賀工業会会長
吉崎 貞一	教育学部同窓会副会長
吉田 芳和	前・経済学部陵水会理事長



大学側の出席者及び列席者

初の外部評価委員会開かれる

本学の教育・研究活動、地域社会への貢献状況、管理運営等に関する自己点検・評価の結果について、学外者による検証を行い、教育・研究活動等の一層の改善充実に資することを目的に、六月十九日（月）、第一回の外部評価委員会を開催した。

当日は、小川英次 中京大学長を除く、五名の委員が出席し、六つの点検評価項目について委員会が進められた。

同委員会では、委員長の傳田功 京都学園大学長が議長となり、大学の理念、大学の将来計画、大学改革の推進体制、大学改革の現状、教育活動に関する事項、研究活動に関する事項について、学長、副学長、両学部長及び事務局長からそれぞれ説明が行われ、質疑応答、意見交換の後、各委員から評価・意見が述べられた。



左から、加茂、桂 各委員、傳田委員長
鈴木、木下 各委員

外部評価委員会委員（委員は五十音順）

傳田 功	（委員長）京都学園大学長
小川 英次	中京大学長
桂 泰三	シャープ（株）顧問
加茂 直樹	京都女子大学教授
木下 繁彌	甲子園短期大学長
鈴木 善次	大阪教育大学名誉教授



大学側の出席者

人間性ゆたかな専門人の養成
創造的精神を培う教育システム
地域への積極的な貢献
世界への発信と交流
特色ある複合大学
自律的で活力ある大学運営

3つの「C」

Creation	=	創造
Cooperation	=	協同
Contribution	=	貢献

21世紀の教育学部の役割とは

急激に変化しつつある現代社会は、多くのひずみや矛盾を内包しながら、二十一世紀を迎えようとしています。十全な人間発達を欠くことに由来する教育問題や性・人間差別、高度に情報化が進むネットワーク社会への対応、さらには地球規模で進行する環境汚染、資源枯渇、これらの問題は私たちの英知をもつて、解決しなくてはなりません。私たちの教育学部では、教育の原点に立ち還り、これらの問題を考察する体勢を整えております。

教育と研究は、もともとその目的とすることは異なりますが、互いに補完し合つて機能したときに、最大の効果を発揮します。また、教育と学問の成果は、人類に普遍的に等しく提供されるべき性質のものと考えます。私たちの教育学部は、ひとりひとりの知的教養を錬磨し、芸術・文化に対する感受性を涵養し、自然に対する畏敬の念を養うことを目指しております。同時にまた、人間に対して、深い共感と理解を示し、専門知識に支えられた知性にあふれ、人間性豊かな人格形成を目指しています。

このような理念にもとづき、学校教育教員養成課程においては、教科

に対する専門的理解、いじめ・不登校などに対応できるカウンセリング・マインド、人権・差別、国際理解、情報教育、環境問題、などの現代的教育課題に対応でき、それに加えて、教員の原初的資質である幼児・児童・生徒に対する深い愛情と理解、

教育学部

目指せ!!あすなる教育 と情報・環境世紀

および教職に対する情熱をもつ教員の養成を目指しています。

また、情報教育課程においては、きたるべき高度情報化社会に対し、確かな社会観と情報技術を身に付け、これを運用して、学校や社会に発信できる人材を育成することを目

指しています。

一方、環境教育課程にあつては、私たちの周辺の環境から出発し、地球規模の環境を視野にいれ、これを学び、自然との共存をめざし、よりよい環境を創出できる人材を育成することを目指します。

私たちの教育学部のこれら三課程は、それぞれ異なった目的、理念、個性を持っておりますが、それぞれの課程を充実しながらも、自己完結することなく相互補完的に、教育の本来的、究極的な目標である人間形成を目指しております。

個性ある教育学部を目指して
— 学部づくりの方針・目標 —

深い教養と知性に支えられた、人間性にあふれ、専門性の高い人材の養成

全人的人格陶冶と創造的精神を
培う教育システム

地域社会への積極的貢献

世界への発信と交流

特色ある教育研究活動の実績と

展開

教育・研究の自主性、自律性が尊

重される教授会運営

教育学部理念ワーキンググループ

(井深 信男、小池 澄夫)

知の21世紀をきり拓く

本学は、21世紀における大学の社会的役割を念頭に置き、個性ある魅力的な大学をめざす。

教育理念として、「グローバルな視野をもち、人間性ゆたかな教養を備えた専門性の高い職業人の養成」を掲げ、3つの「C」を合言葉に、次のような6つの目標に向かって大学づくりを推進する。

建学の理念と誇りつる独自性

本学部の前身、彦根高等商業学校は、建学の精神として「士魂商才」を謳い、それに対し養成すべき人材としての相互扶助・社会奉仕的精神をもった商業的技術の専門家という独特の意味を付与しました。それは、地域社会への奉仕・貢献を前面に出し利益追求を副次的とする近江商人の精神と大きく合致するものでした。こうして、幕末期彦根藩が示していた視野の開明性・先見性と教養重視の伝統とも相俟って、彦根の地に、高い人格と豊かな教養を備え地域社会にも貢献できる専門職業人の養成の場が創り出されました。

そうした彦根高商の伝統を受け継いで、第二次大戦後、発足した滋賀大学経済学部は、経済界等に多くの優れた人材を輩出しながら、社会と地域の要請に応えて大きな発展を遂げてきました。そして、古来より近畿・東海・北陸の経済的文化的交流の点であり、琵琶湖をかかえ環境意識の高い滋賀県に立地する国立大学経済学部である本学部は、そうした学部としては、全国最大規模の陣容を整えていること、特に国立唯一のファイナンス学科および人文・社会・自然諸科学の学際的研究教育を担う社会システム学科を含めて、六学科・

修士二専攻を有する総合的性格をもつ経済学部であること、附属史料館は、中世社会に関する我が国第一級の貴重な史料をはじめとして、近世近代の古文書群を所蔵し、近江商人・近江地域史研究の拠点になっていること、等の独自性を備えるに至って

経済学部

古くは『士魂商才』、
新しくは『グローバル・
スペシャリスト』

います。

教育理念と学部づくりの目標

二十一世紀を迎えて滋賀大学経済学部は、これまでの実績と伝統に安

住することなく、独自の工夫をこらした改革を進め、急激に変化する社会と地域の要請に応え、有為の人材の養成とより高次の知識創造・学術文化に資する高等教育機関としての発展を目指します。

滋賀大学経済学部は、建学の精神を現代に生かした教育理念として「国際的な視野をもち、環境に配慮しつつ地域社会にも貢献できる、個性ある専門職業人の養成（グローバル・スペシャリストの養成）」を掲げ、その資質として三つの識「意識・知識・見識」（問題意識・専門知識・規範意識）の涵養とそれを基礎にした問題探求能力の育成をモットーにして、次のような目標に向かって学部づくりを推進します。

二十一世紀の経済社会のニーズに応える人材養成

問題探求能力を培う教育および学際的な研究のシステム

地域に根ざした教育・研究活動の展開

国際的な学術・教育交流の推進

歴史的な実績と伝統の踏襲・発展

全員参加の活力ある学部運営

経済学部理念ワーキンググループ（荒井 壽夫、神山 進、黒石 晋）

第1回 ネット社会のリスクを知る

- インターネットは第三者の不正なアクセスによる盗聴の危険性が高く、例えばウェブブラウザや電子メールによるメッセージ転送は比較的容易に盗聴されてしまう場合がある。
- 直接相手が見えないネット社会では、なりすまし行動が脅威になる。例えば電子メールの送信者あるいは受信者になりすましての詐欺行為や、システム管理者になりすましてパスワードを奪取したり、にせのホームページを公開して不正に情報発信・情報収集するなどの危険性がある。
- 不正アクセスにより、ホームページを改ざんされ、社会的信用の失墜や損害賠償に至るケースが考えられる。

が社外へ流出し、企業の信用問題につながる。

- メール爆弾によってメールサーバなどのシステムが停止し、その日のさまざまな業務や取引に影響が出る。
- 大規模な情報ネットワークシステムの場合、企業資産であるパソコンやネットワークの私的利用までは管理が行き届かず、私的利用増大により、利益を損失する可能性がある。
- ネットワーク経由での電氣的な侵入だけでなく、直接企業内へ侵入し、情報略取や盗聴ツールをセットされるだけでなく、偽りの情報発信をして不正取引をされる場合がある。



■ すべてのリスクは人が招く

IT化により高度な情報セキュリティシステムを導入しても、リスクは、そのユーザである人に起因することがほとんどです。従来、会社の総務部や人事部が行ってきた社内規則の作成や安全対策、警備など、人や組織の管理に関する仕事を、IT化の流れで情報システム管理部門が中心となって、人（ユーザ）や組織の管理を行うケースが増えています。情報システムにおいて人（ユーザ）を管理しなければならない場合には、情報管理に関する事項を規定などにルール化して社員に周知徹底し、その規定には不正アクセスに対して罰則規定などの牽制手段を盛り込む必要もあるでしょう。

人（ユーザ）をヒューマンリソース（人資源）ととらえ、人（ユーザ）というシステムが情報システムの中にあると考えるのです。つまり、ネット社会のリスクを知るためには、IT化の情報システムを利用する人（ユーザ）や組織の管理を理解することが最も重要なポイントなのです。

【参考文献】

- 中易，坪野：情報科学，共立出版，（1997）
 力武：プロフェッショナルインターネット，オーム社，（1998）
 田中：情報セキュリティ・マネジメント入門，日本経済新聞社，（1999）
 週刊東洋経済，（1999.11.20）
 向日：人間と情報システム，税務経理協会，（2000）
 山口，鈴木：bit別冊情報セキュリティ，共立出版，（2000）
 Computer Today，No.97，（2000.5）
 セキュリティ研究会：まるごと図解最新インターネットセキュリティがわかる，技術評論社，（2000）
 太田，好永：ITによる情報・知識の共有と蓄積—技術情報基盤（テクノインフラ）の構築—，日本機械学会誌，Vol.103，No.977，pp.44-47，（2000）

企業経営上のリスク

- 自然災害により企業システムの機能が部分的に停止したときに情報流出などのセキュリティ問題や、利用サービスの停止に伴う顧客への補償などの問題が発生する。
- システムの導入によって、事業拡大や利便性が改善できる反面、安易なIT化では情報セキュリティの弱点が増大することを理解した上で、ビジネス展開を推進しなければならない。
- セキュリティホール（セキュリティ上の弱点）や過失および社内不正などにより、個人・顧客情報や社内秘情報

ここがポイント!!「ネット社会を知る」

滋賀大学情報処理センター助手 中川 雅央

連載について

最近、情報技術(IT: Information Technology)という言葉をよく耳にします。そもそも「情報」とは何でしょうか。「情報」が存在する前提になるものには、「情報源」、「情報を保持する媒体」、「情報を伝達する手段」の3つが必要です。この前提条件に、それぞれ人間とコンピュータ技術とネットワーク社会が当てはまることによってITが成り立っているのです。この「情報」をいかに駆使するかがポイントとなる「ネット社会」という形で、私たちは21世紀を迎えるでしょう。

現代社会において、このITを有効な手段として活用することは、もう当然の常識となりつつあります。特に経済活動にはITが必要不可欠であり、私たちはITによって多様化するネット社会を知る必要があります。

この連載は、ネット社会を知るためのポイントとなる分野について、主に事例を中心に解説していききたいと思います。

第1回：ネット社会のリスクを知る

ネット社会におけるリスクの例を挙げ、人・組織の管理の重要性について解説

第2回：情報セキュリティを知る

ウイルスやハッキング等のネット攻撃から身を守るための情報セキュリティについて解説

第3回：プライバシーと知的財産を知る

著作権・商標権・肖像権・個人情報の管理等および不正アクセス禁止法を解説

第4回：情報技術(IT)教育を知る

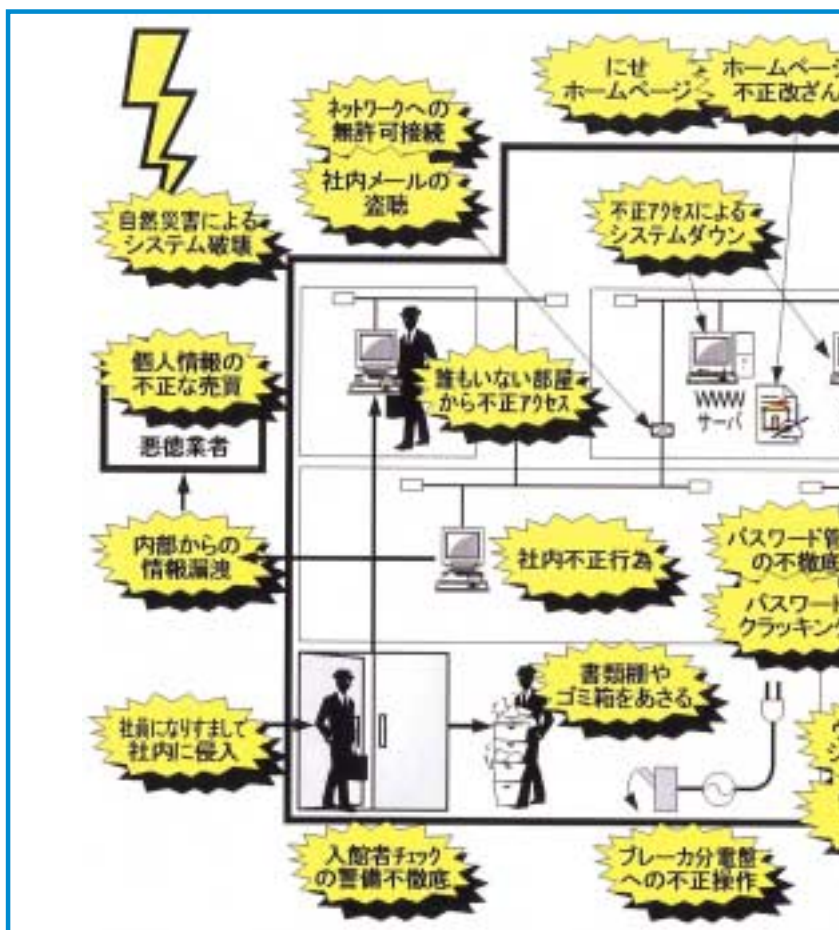
情報技術(IT)教育の現状とこれからの情報技術(IT)教育システムについて解説

第5回：ネット社会の将来を知る

ネットビジネスや電子商取引(E C)とネット社会の将来ビジョンについて解説

■ 急速な進展によるリスク

ここ1、2年の間にネット社会は急速に進展し、新しい技術や新しい概念が次々と生まれました。その新しい情報が生まれるスピードについていけないことによってリスクを被ることがあります。新しい情報を知らないことがリスクにつながるケースは非常に多く見受けられます。リスクといっても、その意味するところは非常に広いので、具体的な例を取り上げることにします。



第1回 ネット社会のリスクを知る

■ コンピュータネットワークの普及

近年の技術革新により、コンピュータネットワークは家庭やオフィスへ急速な普及を遂げました。1950年代にコンピュータが作られた当時は、部屋いっぱいの巨大な機械だったものが、1990年代後半には、大学や企業だけでなく各家庭にまで置かれるようになり、コンピュータをネットワーク接続して利用されるようになりました。現在では仕事や生活の中でコンピュータネットワークを必ず利用しなければならない社会になっています。これがいわゆるネット社会です。

【事例】

一般に起こりうるリスク

- コンピュータウイルスに感染したことに気づかないまま、ファイルの配布や電子メールを送信したことで、ウイルス感染による被害が拡大する。
- インターネットでのショッピングに利用するクレジットカード番号を不正に盗聴され、その番号を元に本人の知らないうちに貯金残高などの個人情報が流出する。
- デマ情報の電子メールなどは、短い時間で多くの人間に伝達しやすく、社会的なパニックとなる危険性がある。

生命燃焼への自己確立

四年前に『氣』への招待』と題して公開講座を実施した。その時の概要は、未だ市民権の得られていない『氣』のメカニズムと氣功実習とが主であった。今回は第二回目として自己治癒力に照準を合わせ、前回同様津市との共催でとり行った。

前回は五週にわたったにもかかわらず定員いっぱい、しかも出席率はほぼ一〇〇%に近かった。今回も正式集約はまだ知らされていないが毎回の状況から出席率は九〇%を超えているように思われる。

ここに今回の内容の主たる項目を掲げながらその全貌に迫ることにしたい。



イメージ(意念)呼吸法をもとにした自己治癒力の把握

「氣」の概念とは

まず「氣」の概念規定についてであるが、ここで取り上げる「氣」は必ずしも中国にとらわれることなく、例えばインドの伝統医学にみられるアユルベエダ、あるいはわが国においても独自の手法で確立されているものなど全てを「氣」という概念の中に取り入れて扱うこととした。とはいっても、なお「氣」は霧の中にある。そこで今回は「氣」というものが物質レベルから精神レベルまであると仮定し、比較的物质レベルの「氣」に限定して論じることとした。これはいわば放送局から流されるテレビ電波に相当し、目に見えない電波が受信機であるテレビ内で増幅されると音声やカラー画像が出現するのと同じという観点に立脚している。

自己治癒力の把握

次にプライマリーケアとして、イメージと呼吸法をもとにしたペインシフトの権威者による痛みを教材とした自己治癒力の把握とその実習についてである。痛みといったきわめて主観的な現象を呼吸法とイメージによって根絶へとシフトさせるのである。これは、ひとつの症状に対して、種々の分析機器から得られた症状数

「氣」への招待 Part II —自己治癒力にいどむ—

値をもとにマニュアル化された物差しで診断結果を導くのではなく、症状の根源までさかのぼり、そこから根絶の方向への処方箋を導く手法であり、ここには大いにものの見方・考え方という自己治癒力と関連の深いキーポイントが横たわっている。

イメージ(意念)は、右脳と左脳、意識と無意識など大いに関連するが、要するに鮮明な疑似体験が人間の言動を規制することと関連が深い。現代人、とりわけ知識・教養人つぼく振る舞う人間の大半が、左脳中心の理屈で生きることが高尚であるかの錯覚に陥っている。ところが人間の言動は、先行経験の蓄積からくる条件反射、換言するならばイメージに多くを依拠することになり思いを馳せ、実習もまじえながら論じられた。

重要な鍵を握る「呼吸」

以上のことがらを推進するにあたって重要なのが「呼吸」である。唯一人間に備わった意識と無意識が関与できる呼吸、実は西洋医学が不都合を是正し健康を求めるエネルギー中心とするならば、東洋医学は摂取からいかにうまく排泄しバランスを保つかといった排泄の医学といわれている。この排泄では特に「呼吸」(吐くために吸う)が重要な鍵を握っている。身を整え(調身)、息を整え(調息)、しかるのち心を整える(調心)ことによって正常な



日常生活での自己治癒力向上にむけた氣功体操実習

ものの見方考え方を確立し、そして自己に備わるおよそ副作用など無関係の製薬会社をフル活用させる自己治癒力の重要性が論じられた。そして、与えられた生命を最大限燃焼させ続けるために、日常生活で簡単に出来る氣の体操(氣功)も実習した。

豊田 一成(教育学部教授)



講義中の筆者

湖東中郡日野八幡在々持余家見立角力

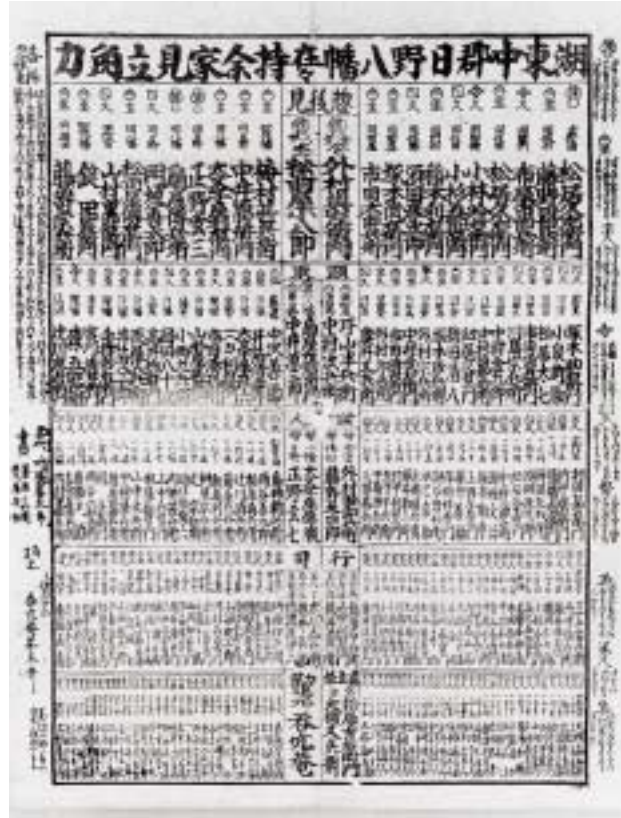
江戸時代の刷り物に、人名を順序づけて並べた番付がある。もともとは歌舞伎・浄瑠璃や相撲興行の宣伝用パンフレットとして作られた役者番付や相撲番付から始まっているが、その後それらの番付を模倣して、長者番付や流行語の番付、諸国珍事番付など、庶民の娯楽として様々な見立番付が作られたようである。

写真の番付は、江戸時代における湖東地方の富豪を列記した長者番付である。タイトルの意味は、湖東の中郡(ここでは主に神崎郡を指す)と日野

町・八幡町近辺の村々で財産を持ち余している家を角力(すもう)番付に見立てたものというようなことである。

総後見人に外村与左衛門・松前屋岡田小八郎を置き、東の番付の筆頭には五個荘位田の松居久左

衛門、西の筆頭には八幡の梅村甚兵衛と、この時代の有名な商人が並んでいる。当史料館で収蔵している近江商人史料として、日野の中井源左衛門家文書・近江八幡の松前屋(西川)伝右衛門家文書があるが、その名前もみえる。地名・



(真崎俊朗氏 寄託)

などには無頓着である等の説明がある。当時の有力な商人たちを知るには一目睹然の好史料といえる。

この番付の作成年代ははっきりしないが、江戸時代後期の天保(弘化頃(一八三〇)四七)かと推定される。同じ番付で順位の違ったものが一点確認されていることから、好評を博したのかク

レームがついたのか、改訂して発行されたようである。いつの時代も、金持ちに対する庶民の関心は大きいもののなのである。う。勸進元・板元はどちらも江州中郡呑穴庵茶楽斎とあり、作者の遊び心が窺える。

庶民の娯楽と

名前の上に見える宝の小槌などの印は、各家の財産の規模や暮し向きの特徴を示すもので、欄外の凡例には、代々続く金も資産も十分な格式ある大店で随一の長者であるとか、金貸し商売で大金持ちではあるが家屋敷や家財道具

南田孝子(附属史料館教務員)

公開講座開催案内(8月~12月)

講座名	講座概要(要旨)	開催期日	担当講師	開催場所
インターネットと教育	インターネットや電子メールを基礎から実際に体験し、学校におけるインターネットの教育利用に関して一緒に考えていく。	8/26(土), 27(日)	宮田 仁 助教授 (教育学部)	教育学部 (大津市)
英・加・日(イギリス・カナダ・日本)の住環境	3カ国の住環境の違いと、居住者の努力について、滞在経験から得られた知見を使って比較説明する。	10/ 7~10/21 毎土曜日	山崎古都子 教授 (教育学部)	教育学部 (大津市)
異文化から見た現代世界	同じひとつの問題をめぐって日本と世界各地の像を重ね合わせて見たとき、その異同の所以や新世紀へと向かう世界全体にとっての重点課題の何たるかをより深く総合的に理解してもらう。	11/ 4~12/ 9 毎土曜日	北條ゆかり 助教授 (経済学部) 外	経済学部 (彦根市)
浅井三代と小谷城	東浅井郡湖北町ゆかりの史実をとりあげ、あらためて浅井三代と小谷城の歴史について考えてみる。	11/11~12/ 2 毎土曜日	村田修三 教授 (大阪大学文学部) 外	湖北町文化交流センター (東浅井郡湖北町)
科学哲学 【公開授業】	「世界で起こる事態は、一つ一つ客観的なものであり、人間が、感覚を通じてそれを受け取る」という前提に立つ論理実証主義と、ヴィットゲンシュタイン、ポパーの考えを概説する。	10/ 2~11/13 毎月曜日	山下一道 助教授 (経済学部)	経済学部 (彦根市)
環境政策と企業 【公開授業】	新たな環境問題に取り組むために構築された制度と、企業の取り組みについて紹介する。	10/ 5~10/26 毎木曜日	森 晶寿 助教授 (経済学部)	経済学部 (彦根市)
物権法 【公開授業】	物の売買や貸借など、様々な場面で物権法の知識が必要となり、そうした物権法についての基本的な事柄を、実例をふまえて解説してゆく。	10/ 6~11/17 毎金曜日	須永知彦 講師 (経済学部)	経済学部 (彦根市)

現在、教育学部附属環境教育湖沼実習センターには、「清流」と「湖精」という二隻の調査艇があります。びわ湖の調査研究はもちろん、学部や大学院の実験・実習、小・中・高の児童・生徒、現職教員、一般市民などの研修の一環として調査艇の利用が積極的に進められています。

本学に初めて調査艇が誕生したのは一九六三年でした。「湖精」と命名された木造の小さな船でしたが、びわ湖中を走り回り、数多くの発見をもたらしました。岡本巖先生（本学名誉教授）の愛艇で、先生の著書「びわ湖調査ノート」（人文書院）には当時の調査の様子が詳細に記されています。「湖精」は一九七九年にその生涯を終え、彼女の思い出の地である舟木崎に多くの卒業生が集い永久の別れを惜しみました。



湖 精

「湖精」がまだ現役であった一九七四年には二艇目の「清流」が進水しました。広い船室と高性能のGMエンジンを備えた高速艇で、びわ湖全域観測を一日で完了することができるようになりました。鮮やかな赤で塗装された船体は、当時のびわ湖で注目を集め、本学のびわ湖調査のシンボルの存在でしたが、一九八九年



清 流

泥・測器の係留などが効率よく行えます。また、音響測深儀、GPS、風向風速計、無線などを装備し、正確な位置決定と安全に対する配慮がなされています。外装デザインは本学の秋山哲男先生

十月に当時の湖沼実習施設のスタッフと学生・卒業生に見送られて引退しました。

「湖精（二世）」は一九七九年に進水し、その後一九九七年まで多くの調査に活躍しました。瀬戸内海の漁船を改造したFRP製の頑丈な船で、スピードはそれほど

もなかったのですが、北湖の荒波を悠々とかき分けて進むことができました。昨年亡くなられた鈴木紀雄先生がこよなく愛された艇でした。



湖 精(II)

現在の「清流（二世）」（四・九トン）は、一九八九年の進水以来十年を経過しましたが、今でも巡航速度二〇ノット（時速約三七キロメートル）で快走しています。安定性に優れた船で、さまざまな調査や授業で活躍しています。ワイヤーウィンチ、キャブスタンなどを備えているので、採水・採

によるものです。

一九九七年三月に進水した「湖精（三世）」は、スピードと旋回性を重視するとともに、水草地帯や沿岸の浅い水域での調査に威力を発揮すべく設計されました。スピードは約十八ノットで、僚艇の「清流」にひけをとりません。船体は「清流」よりかなり小ぶり（三・五トン）で、旋回性に優れ、いわゆる小回りがきく船です。最大の特徴は、船内外機（アウトドライブ）を採用したことで、スクリーンや舵がボタン一つで昇降するため、水深のかなり浅いところでも航行できます。

センターには調査艇を操縦する専任の技官が配置されていないために、各教官が責任を持って操船にあたっています。また、教官が所持する船舶免許の関係から、調査艇の総トン数が



清 流(II)

五トン未満に制限されています。このようなハンディキャップを乗り越えるために、休日や祝日においても積極

的に出航し、また大雨や台風直後、あるいは赤潮やアオコ発生の際に接すると同時に出勤するなど臨機応変な



湖 精(III)

調査を行うことによって、数多くの新事実を発見してきました。

夏期集中授業の「湖沼学実習」では、二隻の調査艇がその威力をいかに発揮し、総勢七十名に及ぶ学生の体験学習をより大いなものにしてくれています。私たちの愛艇は、これからもびわ湖の謎を探り続け、また多くの学生達にびわ湖のすばらしさを伝えてゆくことでしょう。そして地域社会に開かれた大学を目指すために、本センターでは調査艇を活用した「びわ湖体験学習」プランを構築しつつあります。

遠藤 修一（教育学部附属環境教育湖沼実習センター長）

大野 晋著『日本語練習帳』

「正しい日本語を使おう」とか、日本語が乱れているとか、まともにいわれると、「正しい」とはどういうことか、「乱れている」とはどういうことか、こゝとは変わるものだ、と、うそぶいてしまいます。このような私も、午後になつてから珍妙なイントネーションで、おはよう」と挨拶するのを聞いたりすると、世の中はどうなっているんだ」と思わず叫んでしまします。そういう私の日本語が確かかという、それは恥ずかしい限りで、何とかしなければと反省してばかりです。そこで、文章読本、論文の書き方など新しい本が出るたびに、目ぼしいものは読まなければと思つたりするので。

『日本語練習帳』もそういう本の一冊です。どうすればよりよく読めて書けるようになるか。何に気をつけ、どんな姿勢で文章に向かえばよいのか。練習問題に答えながら、単語に敏感になる練習から始めて、文の組み立て、文章の展開、敬語の基本など、日本語の骨格を理解し技能をみがく。学生・社会人のために著者が六十年の研究を傾けて語る日本語トレーニングの手順というキャッチコピーに引かれて私も、練習をすることにしました。「単語に敏感になろう」「文法なんか嫌いー役に立つか」「文章を書く上で二つの心得」「文章の骨格」「敬語の

私の薦める1冊の本

内田 耕作（経済学部教授）

基本」の五章を読みながら、問いに答え、巻末の「配点表」で採点して、結果の判定を下すという成り行きです。

書かれている内容はいちいちもつともで、ふむふむ」とうなずきながら練習を終えましたが、一か所ではたと止まってしまいました。法学を勉強してきた私にとっては懐かしい川島武宜『日本人の法意識』が、なんと悪文の例として延々とやり玉に上がっているではありませんか。その上、センテンスの長い分りにくい文章が多いのは法律、および法学の先生の文章です。法律の権威を背後にもっているせいでしょうか。法学者の文章は、日本語としての分かりやすさに配慮しないものが少なくありません。などため押しまでしてあります。法学者としての言い分もあるのですが、大いに考えさせられました。

最後に、『日本語練習帳』で練習をしたわりには、あなたのしゃべる日本語はあいかわらずひどく、文章も乱れていますね」との声がどこからか聞こえてきそう。それに対しては、私も法学者の端くれですからと答えるのはすねているので、人間は急には変わりません、努力を続けることが大切ですよと答えることにしています。

よろしかったらまだの人は、『日本語練習帳』に「六六〇円＋税」を投資し、日本語のチェックを試してみたいかがでしょうか。

人間と植物の新しい関係学をめざして

人類は植物の栽培をいつの頃から始めたかについては解かってきているが、植物が人間に与えてきた影響の歴史は不透明である。旧人類であるネアンデルタール人の埋葬遺跡から大量の花の花粉が出土し、彼らがすでに植物と深い係わり合いを持っていたと考えられている。ところが現代人は傲慢にも植物を無視して人間が成り立つと思っている節がある。パーチャルリアリティーの世界にのめり込んだ若者達が未来の姿であるとすれば、緑の地球は長くは存在しないであろう。

今、人間と植物の関係を探りなおそうとする研究が欧米を中心に進んでいる。現在の日本で「児童にとって栽培活動は必要なものなのか」と問えば、否定する人はほとんどない。しか



小学生は栽培活動が大好きだ

私の研究

木島 温夫（教育学部教授）

ば、身体を動かせる因子、心の働きを引出す因子、動作を持続させる因子等が考えられる。これらを検討し、相互影響の構造を明確にしたいと思つてい

し、「実際にそのための時間を割く努力をする」人は少ない。「時間がない、条件が整っていない、場所がない」などの理由をつけて、それを克服する努力はしない。それは、人間と植物の関係が未だ十分に解明されていないからであると私は考えている。

私の研究は「栽培活動の教育力」「農の教育力」を中心に「栽培活動が人間に与える影響」を因子別に検討する事である。例えば、身体を動かせる因子、心の働きを引出す因子、動作を持続させる因子等が考えられる。これらを検討し、相互影響の構造を明確にしたいと思つてい



高齢者専用市民農園で楽しむ高齢者

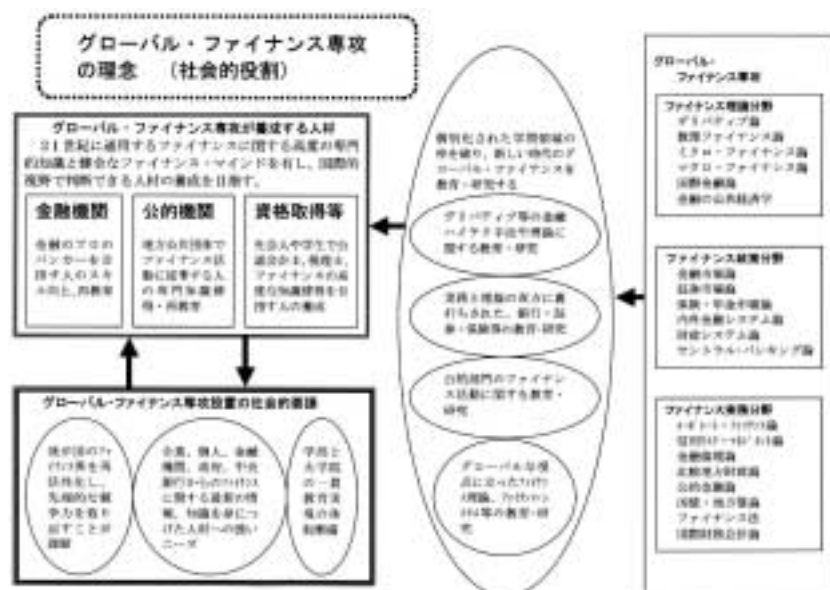
大学院グローバル・ファイナンス専攻 (修士課程) 新設に向けて

全国初のファイナンス学科(学部) 設置の意義

本学経済学部は全国初のファイナンス学科が新設されたのは、平成三年(一九九一年)四月でした。国立大学で初めてのカタカナ名の学科ということで大きな話題を呼び、バブル崩壊後の金融面での反省とバブル再発防止策の検討、不良債権処理策、金融倫理問題、デリバティブ(金融派生商品)を中心とする金融工学研究、金融ビッグバン対策等々についてもファイナンス学科の教官が積極的に研究し、その成果を基に発言を行ってきました。その意味でファイナンス学科設置の意義は大きかったといえるでしょう。平成四年以降私立大学でもファイナンス学科や金融学科新設が相次ぎましたが、本学ファイナンス学科設置はその先鞭をつけたものでした。

グローバル・ファイナンス専攻(大学院) 新設の必要性

社会・経済の情報化・グローバル化が急速に進展している今日ほど、ファイナンスについての総合的知識を必要としている時代はなく、そのような大学院設置が切望されています。ファイナンスとは資金の調達と運用に関する総合的学問分野ですが、企業、個



一九九二年には英国が通貨切り下げを余儀なくされたり、一九九七年には東南アジア諸国が経済的困難に落ち込まれたり、全世界的規模でヘッジ・ファンドの規制問題がクローズアップされています。また

各国内においてもデリバティブ取引は急速に拡大しているにもかかわらず、金融工学の手法はまだ十分に普及しておらず、莫大な損失を蒙る例も枚挙にいとまがありません。とくに地方においてはデリバティブを含めたりスク管理手法を取得した人材の不足は著しく、その早急な養成が急務となっています。

他方一九九七年のノーベル経済学賞は、デリバティブ研究に貢献した二学者に授与されましたが、理論の進展も日進月歩でその手法は三、五年で陳腐化するともいわれています。このような状況下、日本の金融界や官界でデリバティブ等の金融ハイクテク手法や理論を理解し、新しい金融商品を開発する能力や政策立案能力を持つ人材育成も緊急の課題です。

また従来の融資姿勢は、担保があれば貸すという「有担保原則」に基づいたものでしたが、バブル期の土地や株、絵画の高騰に伴う過剰融資が、その後の担保価値の下落により不良債権累積の大きな原因ともなっています。

す。しかし近年のベンチャー・キャピタル育成のための資金供給拡大など、担保がなくても貸し出しを行わなければならない優良な顧客を失うケースも増加しています。顧客に対する確かな分析やリスク管理など、ALM(資産・負債の適正な管理)の手法の再教育や金融倫理も産業界から強く求められています。

欧米の金融業界はデリバティブによる収益拡大を通じ、衰退産業から成長産業への脱皮を図っています。しかし日本においては、とくに関西においては、体系的なデリバティブ教育機関が少なく、デリバティブの専門家が絶対的に不足しています。

このように、わが国の金融界は内外の急速な変化に立ち遅れており、金融業界が成長産業として再び活性化し、国際的にも先端的な競争力を取り戻すことはファイナンス分野のみならず、わが国経済の健全な発展にとっても最も重要なことです。大学審議会の金融工学を中心とする大学院設置提言もこのような状況を背景に出されたものです。こうした社会の強い要請を基礎に本学では大学院経済学研究科に、これまでのファイナンス教育・研究の経験・蓄積を生かした本学ならではの地域に根差した「グローバル・ファイナンス専攻」を平成十三年(二〇〇一年)四月に新設する計画で、現在、随意準備を進めているところで

金融のプロ育成を目指す新専攻

本専攻ではグローバルな視点を持つ、ファイナンスの総合的知識を身に

陵水学術後援会協力

特別講義『現代の経済』

昨年度の秋学期に開講された特別講義『現代の経営』は、本学出身で陵水会名誉会長の樋口廣太郎氏を筆頭に、多くのアサヒビール経営幹部による、我々に身近なビール会社の経営問題という実践的な講義内容であったため、毎回講義室が満員となるほどの盛況ぶり、学生の皆さんへのアンケートでも大変好評でした。

この特別講義の目的は実業界、民間の研究機関など、実社会で活躍している経験豊富な社会人講師を、毎年定期的に招いて、実社会と密接に関連した、新鮮かつ実践的なカリキュラムを提供頂き、受講される学生の皆さんばかりでなく、本学の教育のあり方にも多くの刺激を頂こうとするものです。

今年度は同じ特別講義のシリーズ・第二弾として、『現代の経済』が4月21日から開講され、当日は、23教室に詰め掛けた満員の学生を前に、まず最初に成瀬経済学部長から開講の辞があり、当講義の意義などについて詳しく紹介されました。学部長からの紹介等をもとに、当講義のポイントをまとめると以下の通りです。

今回の『現代の経済』は、副題に「実践経済学」とあるように、学生の皆さんに現実の「経済を見る目」を養ってもらうため、実際に日々の経済動向を分析しているエコノミストの方々に「経済をどのように分析し、解釈していけばよいか」を判りやすく講義していただくものです。

講師陣は日本生命同社のシンクタンク、ニッセイ基礎研究所から3名をお招きして、多忙なスケジュールを縫って毎回東京から駆け付けて頂くことになっています。当日第1回目の講義をされた客員助教授の久保英也氏（日本生命資金証券部次長）は数十兆円もの巨額の資金運用を手掛けるチーフ・エコノミストとして腕を振るうかたわら、日々のマスコミや経済専門誌などでも盛んに論陣を張っておられます。また久保氏と交互に講義を分担される客員助教授の小巻泰之氏（ニッセイ基礎研究所副主任研究員）も日本経済、金融専門の若手アナリストとして多くの研究実績を挙げておられます。

最終回の7月14日にはニッセイ基礎研究所社長の正田文男氏（元日本生命副社長）が、お二人の講義の総仕上げとして、ご専門の年金などの社会保障問題を取り上げて日本経済の将来展望について講義頂くことになっております。正田社長は保険業界・金融界きっての論客として知られた方で、保険に関する著書等も多く著されておられます。この最終講義には出来るだけ多くの学生・学内関係者の受講が可能なように、必要な処置（教室の変更等）を取る予定ですので、この問題に関心のある方のご来聴を歓迎致します。

なお、最後になりましたが、昨年度の『現代の経営』、本年度の『現代の経済』ともに（財）陵水学術後援会協力講義として物心両面での暖かいご支援・ご協力をいただいておりますことを申し上げますとともに、今回特にお世話になった本学出身で陵水会元理事長である川瀬源太郎日本生命名誉会長はじめ陵水会の関係各位に厚く御礼申し上げます。またニッセイ基礎研究所常務として今回の講義実現のため種々ご尽力賜りながら今春急逝された著名なエコノミストである故山村浩氏のご冥福をお祈り申し上げます。

小川 功（経済学部教授）



講義する久保英也日本生命資金証券部次長

つけた健全なファイナンス・マインド溢れる人材育成を行いたいと思います。すなわち以下のような人材養成を目指しています。

金融工学とくにデリバティブ等の金融ハイテク手法や理論を理解し、新しい金融商品を開発する能力や政策立案能力を持つプロフェッショナルの育成を図る。

金融業界や地方公共団体の財務担当者に対し、顧客に対する的確な分析能力の向上とALM手法の再教育、国債・地方債の管理手法・償還計画の再計画、金融法務、ファイナンス会計

等実務能力増強を図り、金融のプロを目指す人々を育成する。

グローバルな視点から現実の経済、企業を分析できる公認会計士や税理士等資格取得希望者や、高度金融理論を理解できる一般人の育成を目指す。

やる気のある人はチャレンジしてみませんか。

有馬 敏則（経済学部教授・大学院制度検討委員会委員長）



デリバティブ理論でノーベル経済学賞を受賞したマイロン・ショールズ博士と筆者

念願の教育学部研究棟

新営工事始まる



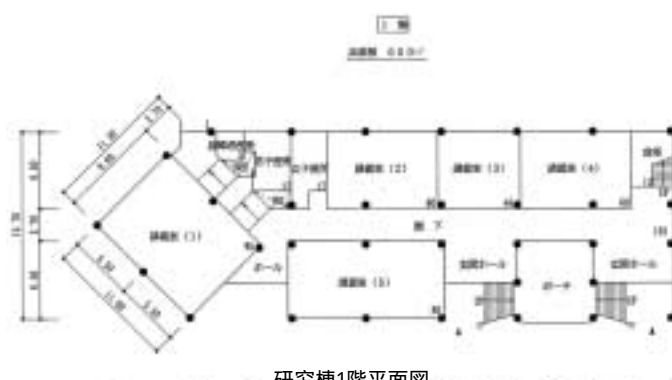
完成が待ちどおしい教育学部研究棟

この度、教育学部の積年の要求であった「教育学部研究棟」が新営されることとなった。教育学部においては、近年、大学院の新設、学部改組、カリキュラム改革等が相次ぎ、講義室、演習室等の不足が一段と深刻になって、講義室等の整備・充実が緊急の課題となっていた。今回、関係者の尽力により、研究棟の新営が実現することとなったもので、五月十五日(月)には、本部から学長、副学長、事務局長等が、教育学部からは、学部長、評議員等が参列する中、起工式が執り行われた。

新研究棟は、鉄筋コンクリート三階建一、八

七五㎡の建物で、壁面に白っぽいタイルを施した瀟洒な建物となっており、建物内は、授業や研究会等に使用される講義室が九室配置されるほか、各種の実験室や演習室が設けられることとなっている。この建物は、本年十一月末に完成し、教育学部の教育・研究活動等に大いに活用されて、教育学部の発展や地域との交流の推進に大いに寄与するものと期待されている。

なお、建物の位置は、現在のA棟(人文・社会・教育棟)及びB棟(自然科学棟)に隣接する形で建設される。



研究棟1階平面図

近江の散歩

「近江商人」の里、五個荘町へのいざない

世に「ベンチャー精神・ベンチャー企業」という単語が氾濫するご時世となっている。「ベンチャー精神」とは「軽薄なる冒険心」の謂いだとしたのは、とある詩人であった。その感性に納得しながらも、「何を今更…」という思いを抱いたのは、たぶん「近江商人」を輩出した土地に住み、「近江商人」を研究対象としているからだろう。

滋賀県には「近江商人」の里を標榜する所は幾つもある。近江八幡市・日野町・五個荘町・安曇川町・高島町等など、それぞれが由緒と正当性を述べている。これらの自治体が主張する「近江商人」は、学問的な観点からいえば問題がなきにしもあらずであるが、滋賀県自体が「近江商人」を顕彰しながら経済の活性化を図っていることもあり、なかなか実像の修正は困難なように思われる。少なくとも滋賀大学では、学問的に「近江商人」を学んで貰いたいと希望している。

さて、このような事情はあるにせよ、「近江商人」の里を散策に出かけることは意義あることだと言える。上記のいずれにしか出てきても新しい知見を得ることができることは請け合いたが、時間に余裕のある人々は五個荘町を訪れたら良いだろう。

ここは「てんびんの里」を名乗り、町営の近江商人博物館には戦国期以来の当地の商業活動に関わるパノラマや史資料が常設展示され、企画展が年に四回ほど行われる。とりわけ「金堂」地区は、商家の町並みの景観保存がなされ舟板堀の「近江商人屋敷」が公開されている。地区を流れるせせらぎには錦鯉が泳ぎ、津和野の町を彷彿させる。村の弘誓寺の壮行さは、富裕な商人の信仰の篤さと富の地域社会への還元の生きた教科書である。

ネット授業へ取り組み 情報処理センター

情報系の知識がない私が、センター長を引き受けたのは、付き合いの深い、情報系の若い先生方がおられたからである。さっそく、三月に小樽商大を調査のために訪問した。ここの情報処理センターは、センター長と職員の方の間に、培われた信頼関係があるようで、実に暖かい雰囲気であった。センターは、十七時から二十一時まで無人の状態で開催されている。最初はカードを利用しての入室であったが、数年前に学生を信頼してそれもなくなり、特に問題もないそうである。ゼミ担当の教官は、各自ゼミ室を持っており、三、四回生は、大学での空いた時間を所属するゼミ室で過ごすそうである。次に和歌山大学のセンターを訪問した。ここは省令化されて、昨年新しくできたばかりであり、設備も格段にりっぱであった。印象に残ったのは、ベンチャー企業を起こせるように、学生のための研究室を、センター内に数部屋用意していることであった。両大学のセンターとも、意欲ある学生のために、できるだけ答えようという姿勢である。

さて、渡辺凡夫助教授、村松郁夫助教授、斉藤邦彦助教授が中心となり、センターの優れた設備を使って、地域貢献のためのすばらしい案を考えてくださった。それによると、来年度にも、小中高校はインターネット回線で結ばれ、平成十四年度には、「情報処理」に関する授業が開かれる予定。しかしながら、学校現場において、それを担当し指導できる教員は少数のことである。そこで、渡辺助教授達は、これらの先生方のために、情報処理の技能を取得させ、技術支援を行い、合わせて学校教育のためのカリキュラム作りを手伝つとの事。これらの案は、研究に関係することではなく、ボランティアで

やってくださるので、全く頭が下がる思いである。つい最近知ったことだが、教育学部附属教育実践総合センターの宮田助教授が、大津市や湖西地区学校を対象に、同じような試みをやられているそうである。私たちは、湖東、湖北地区を対象に計画を進めるので、県全体を対象にした大学全体の行事になる。今後の大学は、独立法人化をにらんで、このように自ら地域に働きかけて、貢献していくことが必要ではないだろうか。それぞれの、効果は小さいものとしても、俗な言葉であるが、お客の多い家は栄えるという。私は学生だけでなく、これらの活動で縁のできた多数の方たちが、大学のキャンパスにあふれるぐらい集まるのを夢見る。

中野 裕治（情報処理センター長）



五個荘町ガイドブックより

さらに体力に自信のある人は、かつて佐々木六角氏の居城があつた織山（きぬがさやま）に登って、湖国を一望するのも心地良いだろう。ここから安土城址や長浜辺りを眺めれば、戦国武将の目線を味わえるかも知れない。また、五個荘町域に視線を落とせば、条理制の残された耕地が目に入る。遠く彼方には伊吹山や鈴鹿山脈を望むこともできる。往時の子供たちは、その山の彼方に商内に出かければ、一代で豊かな暮らしを実現できるかも知れないと、期待と不安のない交ぜになった思いで眺めたのではないだろうか。

今は「近江商人屋敷」となった家に生まれ育つた外村繁（とのむらしげる）の小説『草筏』『筏』『花筏』を手にこの町を散策すれば、ひと味違った「近江商人」の里を楽しむことができる。

この他の「近江商人」の里めぐりは、またいずれかの機会に…

宇佐美 英機（経済学部教授）

報道された主な記事（二月～五月）

二月

- * 水環境マップ完成―環境教育湖沼実習センター（朝日（二・二三））
- * フォーラム「これからの市民大学を創る―大学と地域のパートナーシップ」開催―生涯学習教育研究センター（京都（二・二五））
- * 山上から湖流観測―板倉安正教授（毎日（二・一〇））
- * ベンチャー企業の雇用と人事に関するアンケート調査―太田肇教授（京都（二・二四））

三月

- * 滋賀大前期日程合格発表（京都（三・八）他）
- * 第十七回毎日PTA新聞コンクール附属中学校「湖光」優良賞に選ばれる（毎日（三・一四））
- * タイムカプセル開封―附属小学校卒業生（京都（三・二一））
- * 滋賀大合同卒業式（毎日（三・二五）他）

四月

- * 滋賀大に初の副学長（京都（四・二）他）
- * 滋賀大人事（京都（四・二）他）
- * 琵琶湖救助隊展示会の収益金を寄付―附属小学校 5年ろ組（朝日（四・六））
- * 小学校で教科担任制など研究開発校に指定―附属小・中・幼・養護学校（京都（四・六））
- * 私論「生活の中へ―いい汗かこうさやかに―」（草川一枝名誉教授）（京都（四・七））
- * 滋賀大で入学式（中日（四・八）他）
- * 新広報誌「しがだい」創刊（毎日（四・一八）他）
- * 社会人が特別講義「現代の経済」（中日（四・二五））
- * 春の叙勲受賞者（栗林 健・桑田幸三名誉教授）（読売（四・二九）他）

五月

- * 「BOX美術館3」に展示―附属小学校（京都（五・四））
- * 環境フォーラム「容器包装リサイクル法の現状と課題」（朝日（五・一一）他）
- * 県知事と彦根市長が講義「地方財政論」（中日（五・一七）他）
- * 城北小の児童と留学生が交流（京都（五・一八）他）



毎日新聞（平成12年4月18日）

附属学校から

春を自然をいっぱい見つけたよ！

4月27日の「ごどう遊び」の時間に、志賀の大仏（おほとけ）まで、い組の人と一緒に散歩に出かけました。
歩くと汗ばむ気候になってきました。
大仏に到着すると、体育館シューズに履き替えていざ川の中に・・・。
川の水は冷たかったですが、楽しく遊んできました。
前回に続いて「さわがに」をゲット！今回は5匹もゲットしてきました。
ろ組のかには、全部で8匹になりました。

<小学部ろ組（3・4年）学級通信「ぼっかぼか」より>



アスレチックで楽しく遊ぶ生徒たち

新しく15名の新入生を迎えてスタートした1学期、ぼかぼか陽気に誘われた児童・生徒たちが思い切り外遊びを楽しんでいます。

特にこの3月にプレイコートに出現した大型木製遊具（アスレチック）はみんなの大的お気に入り。学部の枠を越えて、みんないっしょに楽しく仲良く生き生きと遊んでいます。

陽射しの優しさを、水の冷たさを、風のささやきを、体いっばいに五感に働きかけて感じるのも大切な勉強。附属養護学校の毎日の学習はいつも「ときどき」「わくわく」がいっぱいです。

（附属養護学校）

● お気づきでしたか？ ●

「表紙の種明かし」

今年三月に滋賀大学広報誌は『しがい』として、広く地域社会へ情報を発信するメディアとしてリニューアルされました。年間五号ですが、そのうち三号は広報委員会の編集グループが責任編集し、残りの二号は学生委員会が独自に責任編集するスタイルが採られ、それぞれは独自に特徴ある内容を目指しています。そこで、一年を通して一つのテーマに基づいて表紙を統一したイメージでつくることにし、素材として経済学部附属史料館所蔵の『琉球貿易図屏風』を選びました。

本年はオリンピックもありませんが、沖縄ではまもなくサミットが開催されます。沖縄は琉球国の時代、日本、朝鮮、中国、東南アジアの国々とのグローバルな関係を保ってきたという歴史的経緯があります。本号の座談会で示されたように二十一世紀に向け



今回の表紙

た滋賀大学のグローバル化が大学の目指す方向の一つです。そこで、滋賀大学のグローバル化を琉球を描いた屏風で強調することにしました。全体の屏風（創刊号九ページ）を六分割し、創刊号と本年度の五号の表紙にそれぞれ利用させていただく予定です。第三号の部分は首里城と天然の良港泊村です。各号の表紙裏（二ページ）にはその部分の解説を史料館の岩崎助教にお願いしています。屏風全体の解説では省略される小さな部分の解説はワン・ポイント知識としてもとても興味深いものです。

第三号の表紙の色が第一、二号のものとは違って海がとても青くなっていることに気づかれたでしょうか。

平成十二年三月に屏風の修復が完了し、第三号からは本来の色彩により近いものとなっています。

千本木 修一（広報委員会委員）

彦根キャンパスの出来事

アカミミ（旧姓 ミドリ）亀子の産卵

去る6月14日早朝、ライオン池を出た私は前日の雨でほどよく湿った史料館の丘に深さ20センチほどの穴を掘り7個の卵を産みました。

夏の暑い日差しに土が温められると子どもたちは孵化します。あと1年半ほどでしょうか。ただ、かえってからも地中の生活を続けてそのまま冬眠に入り、来年春にようやく地上に顔を出します。無事に生まれて滋賀大学のみなさまにお目もじが叶う日を心待ちにしております。



置き去りにされた卵



産卵の様子

アカミミガメ（ヌマガメ科）
学名：Trachemys scripta elegans
甲長12～20cm，最大28cm。
アメリカ合衆国のオハイオ・アイオワからニューメキシコが原産地。

編集発行：滋賀大学広報委員会

委員長 門脇 延行（副学長・経済学部）
川嶋 宗継（副学長・教育学部）
秋山 元秀（教育学部）
磯西 和夫（教育学部）
○千本木修一（経済学部）
岩崎奈緒子（経済学部）
山崎 勝也（総務課）
宮本 俊明（学生生活課）
（○印は本号のチーフ）

〒522 - 8522

彦根市馬場一丁目1 - 1

（TEL：0749 - 27 - 1172）

発行日：平成12年6月30日

E-mail：koho@biwako.shiga-u.ac.jp

ホームページ：http://www.shiga-u.ac.jp

